

# NEWSLETTER

ISSN 2186-9812

## Geo-Communication (ジオ・コミュニケーション) : 新たな出発として

ジオ・コミュニケーションとは、ある事象に関して、「場所」についての何らかの合意があるようなコミュニケーションを意味します。この概念を最初に提唱したのは、デンマークのLars Brodersenです。彼には、L. Brodersen (2008). *Geo-communication and information design*. Frederikshavn: Tankegang A/S.があり、かつてはデジタル版を読むことができましたが、今はもうアクセスできません。ただ、下記の文献は今でもダウンロードできます (<http://ojs.meta-carto-semiotics.org/index.php/mcs/article/view/36>)。 *meta-carto-semiotics. Journal for Theoretical Cartography* (ISSN 1868-1387), vol. 1, 2008, pp. 1-13. に掲載されている下記の長い表題を有した論文です。すでに彼は、いろいろな論文で、この概念の価値を表明しており、それまでの成果をまとめた本が上記であり、その概要を記しているのが下記の論文になります。

Geo-communication and information design – A viewpoint regarding the content architecture of geo-communication, regarding the requirements and potential for reaching agreement on case and location as the basis of decisions based on a phenomenological, communicative, semiotic and rhetorical foundation.

この概念を最初に私が知ったのは、ドイツ・フライブルク大学の研究仲間であるリュディガー・グラザーの伴侶であったシュテファニー・グラザーを筆頭者とする下記の共著論文でした。しかし、彼女の不慮の事故死により、そこで展開されたジオ・コミュニケーションの発想は十分に展開されないままとなりました。そこで、2011年4月に、ニュースレター (NL) そしてワーキングペーパー (WP) を発刊することにしました。このシリーズには継続して刊行していた前身のデジタル雑誌もありましたが、これらを新たにISSNに登録しました。なお、グラザーたちの論文は下記の通りです。

S. Glaser et al. (2008). Geo-communication for risk assessment and catastrophe prevention of flood events in the coastal areas of Chennai, iEMSs 2008: International Congress on Environmental Modelling and Software Integrating Sciences and Information Technology for Environmental Assessment and Decision Making 4<sup>th</sup> Biennial Meeting of iEMSs, <http://www.iemss.org/iemss2008/index.php?n=Main>. Proceedings. Sánchez-Marrè, J. Béjar, J. Comas, A. Rizzoli and G. Guariso (Eds.) International Environmental Modelling and Software Society (iEMSs).

ジオの語源は、geography の起源であるギリシャ語 γεωγραφία (=geographia) の接頭語である γεω (=geo)であり、地球、土地、土壌などを意味します。コミュニケーションは、ラテン語の *communicare* を語源としますが、一つにする、まとめる、つきあう、交際する、行き来するなどの意味が含まれ、*communis* (一緒に) そして、フランス語の *commune* (共同体)、英語の *community* の語源となっています。地理情報システムが普及し、さらに様々な情報ツールが開発され、画像化や情報交換が容易になり、新たな場所との対話ができる時代になりました。さらに気候危機に直面し、ますます地球環境問題への具体的な対応が求められています。

追い討ちをかけるように、ウクライナ危機を通して、全く新たな地政学的問題が資源問題として顕在化しています。「人新世」という地質学的な年代と関連する用語と概念に象徴されますように、新たな歴史が描かれる時代ともなっています。ますますコミュンあるいはコミュニリズムと連動するようなローカルで正確な環境史的記述と新たな経済理論そしてエコロジカルな実践が必要だと考えます。

2023年1月12日

香川大学ICEDS・名誉教授  
村山 聡

# 註解： ハインツ・シリング『マルティン・ルターの伝記：激動 の時代の反逆者』【1】

香川大学 村山 聡

信仰が支配している時期は、  
その信仰がどんな姿をとってしようと、  
すべて輝かしい、心を高めてくれるものであり、  
かつ同時代にも後代にも役立ってくれる。  
ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ『西東詩集』 「荒野のイスラエル」

## 序 激動する「宗教の世紀」を生きたルター

マルティン・ルターはヴィッテンベルクの宗教改革者です。彼は中世から近世にかけての激動期つまり「信仰が支配している時代」に生きていました。宗教が絶大な力を発揮した時代です。宗教がドイツとヨーロッパを100年以上に渡って魅了したという、この歴史上の事実は本質的にルターに感謝すべきことだと思われまます。もっとも、その宗教は「素晴らしく、励みとなり、また実り豊か」であったと同時に、暗く、人を沈み込ませ、そして破壊的でもありました。それをルター自身もまた体験せざるを得ませんでした。気持ちが高揚するような時には成功と希望が満ち溢れ、全ての世界を納得できるかのように感ずることもあれば、苦しい日々が何週間も続く時には、悪魔と闇の力が自らをそして彼の仕事にも襲いかかったのです。とはいえ、決して彼が疑わなかったことがあります。それは、神が彼を預言者として召し遣わせたということでした。

S. 13

本稿は、すでに世界で八カ国語に翻訳されているものの、残念ながら邦訳のないハインツ・シリング著『マルティン・ルターの伝記：激動の時代の反逆者』のドイツ語版第4版の註解をめざすものです。このシリングの著書が語りの口調であることもあり、この註解シリーズではデスマス調で書かせて頂きます。

ここでは日本の読者に対して、英訳本も参照しながら、日本で一般的に知られている教科書的な宗教改革時代、あるいは私自身の言葉としては「宗教の世紀」に関する理解を深めて頂こうというのがこのシリーズの趣旨です。シリングは、彼独自の「信条化の時代」に関する研究蓄積（この点はいずれ詳しく説明します。）ならびに本書の執筆時までの多くの研究者による膨大な

研究成果を独自に取りまとめていることもあり、画期的な宗教改革者ルターの伝記となっています。さらに、シリング教授に自分の博士論文の指導をして頂いたこともあり、その丁寧な文章を独自に解読し、私自身のヨーロッパおよび日本のローカルな宗教史・環境史・経済史研究の成果を組み込み、新たに書き下ろす形にしています。冒頭に掲げた日本語訳（すでにそこには私の解釈が入っています。）を註解する形で議論を進めたいと思います。

その意味で、翻訳ではなく、さらに意識の域を超えて、私自身の解釈と理解が組み込まれているものをご理解ください<sup>1</sup>。また、注釈は基本的に私自身のコメントも含まれており、シリングの元の文章に投げ返しています。原書の注は、英語版の注をそのまま掲載するようにします。なお、その注についてもさらなる注釈が必要な場合は、日本語での書き込みをします。なお、参考文献は適宜必要な限り言及するとして、同書の参考文献リストについては、このシリーズの全ての執筆業務を終えた際（100回ほどのシリーズとして短く見積もってもおそらく3年はかかると思います。）に、英語版に掲載されたものを再掲する予定です。もっとも、私の方で加えた文献については、色分けをして掲載する予定です。

また、英語訳もすでにドイツ語の原文を英語圏の読者あるいは歴史認識を前提に理解しやすいように意識していますが、内容的に問題がないわけではありません。ここでは後に、英訳そしてドイツ語原本を書き込んでおくことにします。さらに、両者を比較対象として、学術的に問題だと思われる点について記載しておくことにします。

なお、ドイツ語の原書は下記の通りです。Heinz Shilling, Martin Luther. *Rebell in einer Zeit des Umbruchs. Eine Biographie*, München: C. H. Beck, 4., aktualisierte Auflage, 2016. 本書は、728頁の大著であり、初版は2012年に刊行され、その後改訂され、第4版が2016年に刊行されました。すでに紹介しましたように、全世界で八カ国語に翻訳されていますが、邦訳はまだありません。

今回、全体の邦訳を検討する予定でしたが、昨今の出版事情では、このような大著の翻訳を刊行することはほぼ不可能に近いと思います。そこで、翻訳をめざすというよりも、ひと段落ごとに、英訳との対比を行いながら、日本の読者向けに註解を行うことにしました。その意味では、翻訳を進めるというよりも、一つ一つ解釈を進めていく形を取ることもあり、また、ただ原文を忠実に訳すというよりも、その内容を咀嚼した上で、文章化をめざしたいと思います。

その意味で、Geo-CommunicationのNewsletterで一連のシリーズものとする予定です。

### <冒頭に訳出したシリングの文章に関する注釈>

1. 最初の文章は、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテの著作からの引用です。その著作名は、*West-östlicher Divan. Mit allen Noten und Abhandlungen*で、その中の”*Israel in der Wüste*”からの引用です。この文章は、「序」が開始される直前に引用されています。邦語版は『西東詩集：翻訳と注釈』平井俊夫訳・解説、郁文堂、

---

<sup>1</sup> 『西東詩集：翻訳と注釈』平井俊夫訳・解説、郁文堂、1989年所収のヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ「翻訳」、同書、349-351頁に説明されている三段階を参照してください。つまり、外国を捉える第一段階、自分の感覚で異質なものを捉える第二段階、そして、「異国のものと自国のもの」とが循環する究極の翻訳の第三段階です。この最終段階の叙述に近いものを本稿ではめざしています。

1989年で、その308頁の訳をここでは掲載しています。なおこの文章は、「世界史および人類史の、本来の、唯一の、最深の、他の何ものにも先んずる主題はつねに不信仰と信仰との葛藤である」の後に続く文章です。その後に続く文章は以下の通りです。「それに反して、どんな形であれ不信仰がむなしい勝利にありついた時期はたとえひととき光を誇示するように見えることはあっても、後世をまえにしてはすべて消滅してしまうものであり、なぜなら無用なものの認識に心を砕きたがる者などいるわけもないからである。」なお、この詩集については、小栗浩『「西東詩集」研究：その愛を中心として』（郁文堂、1972）も参照してください。ところで、『西東詩集』（せいとうししゅう、原題：West-östlicher Divan、Divanはペルシャ語で詩集を意味します。）は、ドイツの作家、詩人、劇作家そして自然科学者、ザクセン・ワイマールの官僚、政治家そして法律家でもあったゲーテの晩年の作品である。ゲーテは1749年8月28日生まれであり、1832年3月22日に亡くなっています。82歳でした。そのゲーテが70歳の誕生日を迎えた晩夏に『西東詩集』は出版されています（『西東詩集：翻訳と注釈』、445頁）。その詩集に含まれている長い「注釈と論考」の中にここで引用されている「荒野のイスラエル」があります（同書、307-322頁）。シリングはなぜこの散文の一部をこの序の最初に引用したのでしょうか。本文の中にも随時引用されているこの散文は何を意味しているのでしょうか。平井の解説によるとゲーテは「少年時代から旧約聖書を通じて東方世界に強い関心を抱いていた」ということです（同書、446頁）。ゲーテはオリエントから改めてキリスト教を見つめ直しています。同じく平井によると、例えば、ゲーテが描く「楽園」は決してキリスト教の天国ではなく、コーランが描く天国であり、キリスト教の「主イエス・キリスト」ではなく、ムスリムから見る「預言者イエス」とされていました。つまり、ゲーテが生きた時代、キリスト教は相対化の渦の中にあっただのかもしれない。そうであれば、ルターの「宗教の世紀」は19世紀にその終焉を迎えたということなのでしょう。シリングは、それ故に、このゲーテの散文を引用したのではないかと思います。

2. 翻訳箇所の末尾のS.13というアルファベットはドイツ語のSeite（頁）の略語で、数字は原書の頁数です。今後、英語版と独語版を比較対象していきますが、英語版はKindle版から独語版は著作からの引用になります。
3. 日本の教科書（ここで「教科書」と呼んでいるのは、山川出版社の『詳説 世界史研究』2017年版の叙述です。）では、第8章に近世ヨーロッパ世界の形成という章があり、ヨーロッパ世界の誕生、ルネサンス、宗教改革、そしてヨーロッパ諸国の抗争と主権国家体制の形成という四つの項目で構成されています。

### <英独比較>

次ページの左側は英訳で、右側はドイツ語の原本です。残念ながら、英訳にはいくつかの間違いとも言える箇所があると思います。

Martin Luther, the Wittenberg reformer, lived in 'an age ruled by faith', as Goethe would have it. Indeed, thanks to Luther, as the medieval period gave way to the modern age, for more than a century religion dictated the path taken by Germany and Europe. Those years proved 'splendid, heartening, and fertile', but they could also be dark, disheartening, and destructive. The contradictions of his age were also Luther's own: he experienced lofty hours of triumph, hopeful that all the world could be convinced, and bitter weeks in which Satan and his dark forces attacked both the reformer and his achievements. But Luther never doubted that God had called him to be his prophet.

Martin Luther, der Wittenberger Reformator, lebte in einer <<Epoche, in welcher der Glaube herrscht>>. Ja, in der Zeit des Umbruchs vom Mittelalter zur Neuzeit war es im Wesentlichen ihm zu verdanken, dass die Religion zu jener Kraft wurde, die Deutschland und Europa für mehr als ein Jahrhundert in ihren Bann schlagen sollte — <<glänzend, herzerhebend und fruchtbar>>, aber auch finster, herzerreißend und zerstörerisch>>. Das musste auch Luther durchleben — in hochfliegenden Stunden des Erfolgs und der Hoffnung, alle Welt zu überzeugen, und in bitteren Wochen, in denen er Satan und seine finsternen Gewalten gegen sich und sein Werk anstürmen sah. Nie aber hat er daran gezweifelt, dass ihn Gott selbst zu seinem Propheten berufen hatte.

1. 英訳では、中世が近世に道を譲るかのように読み取れますが、ドイツ語では Umbruchつまり嵐が木を薙ぎ倒すような変革を意味しています。
2. さらに「信仰が支配している時代」というのは、確かにゲーテ晩年の詩集からの文章の引用です。しかしその普遍性は、ゲーテがそのような時代を特徴づけているのではなく、注釈1に書きましたように、信仰が勝利する時代と不信仰が勝利する時代あるいは信仰と不信仰の葛藤をゲーテは指摘していることが重要だと考えます。その際、シリングの引用は、ゲーテがその問題性を的確に捉え、西洋と東洋特にイスラム世界の信仰へのゲーテの憧憬を前提にしていることにあります。ゲーテのこの著名な詩集をよく話題にしている文化世界に生きている人間には理解が容易かもしれませんが、そうではない世界に生きている読者にはその意味連関を推察することは難しいと思います。
3. また、ルターは中世から近世への移行を推進したという一般的な宗教改革的理解をここでは前提としているように、英訳では読めます。しかし、そうではなく、ルターが、同時代人特にドイツそしてヨーロッパの同時代人に魅了させる

力を宗教に与えたということをシリングは評価しています。そのため、この「宗教の世紀」がもたらされたことにルターに感謝すべきであると言っているのです。しかし、その「宗教の世紀」は明もあれば暗もある。ルター自身その両者を体験していたということも主張されています。

4. さらに魅了されたとすべきところを、方向性を与えたと英訳ではしていますが、それは、英訳者がBannとBahnの読み間違えたのではと考えられます。

ところで、山川出版社が刊行し、このシリーズの教科書としている『詳説 世界史研究』には、「宗教改革と活版印刷術」というコラムがあります<sup>2</sup>。1517年以前にドイツで出版された書物は100タイトルで前後だったのですが、1518-23年までの出版件数は3,113タイトルで、そのうち600タイトルがルターの町、ヴィッテンベルクで出版されています。驚くべき集中度です。ルターは、小さな町、ヴィッテンベルクを一大文化的中心地に引き上げたということです。なお、当時のヴィッテンベルクの人口は、2,000人ほどと推計されている場合もあるようですが確実ではありません。当時の都市というものはどのようなものだったのでしょうか。ザクセンの歴史研究者で第一人者であったカールハインツ・ブラシュケ (Karlheinz Blaschke: 1927-2020) には、代表的な著作である『宗教改革時代のザクセン』があります。幸い寺尾誠氏によって邦訳されています<sup>3</sup>。少し長くなりますが、当時の都市イメージを得てもらうために、ブラシュケ氏の文章を引用しておきます<sup>4</sup>。

村々と比べ宗教改革時代の諸都市は、それ自体なお一つの世界であった。外見的にはすでに、それは大都市、中都市を囲んでいた市壁によって表現されていた。村の住民と違って、市民の胸が彼の街の防壁の内側で、どれほどの安心感・優越感をふくらませていたか、今日の間人はそれを感じ取るなど確実に出来ないのである。また他面、何も壁で仕切られることのない農村地帯の相当距離から、市場の立つ日に狭き市門をくぐりぬけ建物の密集する都会へ入ってくる農民の感情を我々は想像しえない。そこには装飾的な市庁舎や巨大な教会堂や堂々とした市民の家々、技巧に通じた手工業者そして色々な異国風の商品が存在していた。農民が都市を後にして再び自分の村へ向かった時に、囲みで閉じられた都市の空間、稠密にくっつき合っている市民、それに外見的に途方もない奢侈といったものが、彼の心に深い印象をのこしたに違いない。都市の壁はなお200年以上もの間、戦時には有効な防衛施設であるはずであり、大砲術の適用によっても無価値となったわけでもない。当時のザクセンでの最新の都市の一つ、つまり1521年に漸く建設されたマリーエンベルクは、1540年になってもなお、市壁の建造を開始することが適切だとみなしていたのである。

<sup>2</sup> 同書、260頁。

<sup>3</sup> K. ブラシュケ『ルター時代のザクセン：宗教改革の社会・経済・文化史』寺尾誠訳、ヨルダン社、1981年。なお、原書は、*Sachsen im Zeitalter der Reformation (= Schriften des Vereins für Reformationsgeschichte. Band 185)*. Gütersloher Verlagshaus, Gütersloh 1970. 歴史人口学者でもあるブラシュケによると当時のザクセンには10,000人以上の住民を有する都市は一つもなかったようです。上記に登場するマリーエンベルクで4,000人と紹介されています。また、日本人にも著名なドレスデンで6,500人に過ぎませんでした（同邦訳書、129-130頁）。

<sup>4</sup> 同邦訳書、127頁。